「ふぅっ・・・んっ・・・・お客様・・・・私の胸、楽しんで頂けているだろうか？」

「ん～」

可児江くんが、天ブリリアントソープの開園を指示してから30分後には、私に1人の客が付いていた。

どこから得た情報なのか分からないけど可児江くんは、私のプロフィールに「いすずちゃんは、お風呂がだいすきなんだミー！ぼいんが弱点だロン！」なんて書いていた。

「ん～～～～、ちょっと期待はずれかなぁ～～～～。
もうちょっとエロ～～～～く、頑張ってもらえないと、
オジサン興奮しないなあ～～～～。
オジサンをもっと、もぉ～～～～っと興奮させてもらえれば、
たぁ～～～～くさんオプション付けちゃって、
延長バンバンしまくっちゃうのになぁ～～～～」
「りょ、了解・・・したわ。もっと、エロく、エロく・・・」
しかし、私が少しでもこのパークのためになることが出来れば・・・
ラティファ様のためにも・・・そして、可児江くん。
あんなに毎日頑張っている、彼のためにも。

「んっ・・・ふうううっ・・・
きしゅっ！きしゅをっ！
いただけないだろうかっ！」
「まったく、いすずちゃんは
甘えんぼうで仕方ないなあ～。
ほら、オジサンの唾液を
お腹いっぱい飲むんだよ」
「じゅっ・・・ぐじゅうううっ
飲みましゅっ！
ゲスト様の唾液、
残さず飲ませて頂きましゅっ！」

私の心も身体も、
支配してくれるような、
男のひと。

「奥の方にもっ！奥の方にもきしゅ！きしゅの許可をっ！」

「奥ってどこの奥なのかなあ～～～？
オジサン、エリートでもなんでも
ないから分かんないなあ～～～
いすずちゃん、さっきちゃんと教えたよね？
いすずちゃんの一番イイところはどこですかぁ～～～？
だめ軍人のいすずちゃぁ～～～ん」

「まんこですっ！
いすずのまんこの奥にきしゅくらさい！
軍人まんこに平民ちんぽでおしおきしてくらさいっ！
だめ軍人まんこごめんなしゃいっ！」

私の心も身体も、
支配してくれるような、
男のひと。

「奥の方にもっ！奥の方にもきしゅ！きしゅの許可をっ！」

「奥ってどこの奥なのかなあ～～～？
オジサン、エリートでもなんでも
ないから分かんないなあ～～～
いすずちゃん、さっきちゃんと教えたよね？
いすずちゃんの一番イイところはどこですかぁ～～～？
だめ軍人のいすずちゃぁ～～～ん」

「まんこですっ！
いすずのまんこの奥にきしゅくらさい！
軍人まんこに平民ちんぽでおしおきしてくらさいっ！
だめ軍人まんこごめんなしゃいっ！」

「うおおう・・・
ミュースちゃんの膣内は
ヌルヌルだねえ・・・
さすが水の精霊」
「そ、そんなことっ！
言わないで良いですっ」
「ミュースは真面目っ子だけど
毎日一人でしちゃってるからなー」
「サーラマちゃん、それホントかい？」
「当たり前じゃん」
「好き勝手っ・・・
んっ・・・言わないでよっ・・・
ゲスト様もっ・・・
サー、んっ！ラマっ・・・・もっ！」

「うおおう・・・
ミュースちゃんの膣内は
ヌルヌルだねえ・・・
さすが水の精霊」
「そ、そんなことっ！
言わないで良いですっ」
「ミュースは真面目っ子だけど
毎日一人でしちゃってるからなー」
「サーラマちゃん、それホントかい？」
「当たり前じゃん」
「好き勝手っ・・・
んっ・・・言わないでよっ・・・
ゲスト様もっ・・・
サー、んっ！ラマっ・・・・もっ！」

「うおおう・・・
ミュースちゃんの膣内は
ヌルヌルだねえ・・・
さすが水の精霊」
「そ、そんなことっ！
言わないで良いですっ」
「ミュースは真面目っ子だけど
毎日一人でしちゃってるからなー」
「サーラマちゃん、それホントかい？」
「当たり前じゃん」
「好き勝手っ・・・
んっ・・・言わないでよっ・・・
ゲスト様もっ・・・
サー、んっ！ラマっ・・・・もっ！」

「うおおう・・・
ミュースちゃんの膣内は
ヌルヌルだねえ・・・
さすが水の精霊」
「そ、そんなことっ！
言わないで良いですっ」
「ミュースは真面目っ子だけど
毎日一人でしちゃってるからなー」
「サーラマちゃん、それホントかい？」
「当たり前じゃん」
「好き勝手っ・・・
んっ・・・言わないでよっ・・・
ゲスト様もっ・・・
サー、んっ！ラマっ・・・・もっ！」

「今度はサーラマちゃんに・・・。
お、おおっ・・・。
サーラマちゃんの膣内は
アツアツだぁ・・・」
「ん・・・はぁ・・・。
待ってた時間も長かったし、
ほんとコレだるいなぁ・・・。
さっさと出しちゃってよ、
写真撮って、
こいつ変態だーって拡散しちゃうよ」
「なんかサーラマちゃんのダウナーな感じ、
いいよ、いい・・・。
膣内もなんか、
とろとろに煮込まれてるみたいだ・・・」
「はぁ・・・ほんとキモい」

「今度はサーラマちゃんに・・・。
お、おおっ・・・。
サーラマちゃんの膣内は
アツアツだぁ・・・」
「ん・・・はぁ・・・
待ってた時間も長かったし、
ほんとコレだるいなぁ・・・
さっさと出しちゃってよ、
写真撮って、
こいつ変態だーって拡散しちゃうよ」
「なんかサーラマちゃんのダウナーな感じ、
いいよ、いい・・・
膣内もなんか、
とろとろに煮込まれてるみたいだ・・・」
「はぁ・・・ほんとキモい」

「今度はサーラマちゃんに・・・。
お、おおっ・・・
サーラマちゃんの膣内は
アツアツだぁ・・・」

「ん・・・はぁ・・・
待ってた時間も長かったし、
ほんとコレだるいなぁ・・・
さっさと出しちゃってよ、
写真撮って、
こいつ変態だーって拡散しちゃうよ」

「なんかサーラマちゃんのダウナーな感じ、
いいよ、いい・・・
膣内もなんか、
とろとろに煮込まれてるみたいだ・・・」

「はぁ・・・ほんとキモい」

「よ、よろしく・・・お願いします」
「おたのみもうした――――!!!」
な、なんでこんなことになってしまったんだろう・・・
可児江さんが急に現れて、
ミス・ブリリアントソープ、なんて言っちゃって、
私、シルフィーさんと二人で、男の人の前で、こんな、こんな格好しちゃってる・・・

「し、シルフィーさんっ」
「ぶい～んっ」
ダメだ・・・
完全にオプションで使うための
機械で遊んじゃってる・・・
今から、私達、このおじさんに
ミされミちゃうのに・・・
シルフィーさん、
イヤ！とか、怖い！とか、
ないのかな・・・
「コボリー、ちゃんだっけ？
そろそろいい？心の準備できた？」
で、でも、これ以上ゲスト様をお
待たせしちゃいけない・・・
「は、はい。いつでもだ、だいじょうぶです」
「ばっちこ――――い！！！」

「それじゃまずはシルフィーちゃんに・・・
くっ、おおっ、これはっ、ふわふわでありながらもっ、
ギュッと締め付けられる感じだっ」
「んっ、ふふ、んふふふふー♪
シルフィーの中、どーですかー？」
「ふわふわとろとろで最高だよ・・・」

「それじゃまずはシルフィーちゃんに・・・
くっ、おおっ、これはっ、ふわふわでありながらもっ、
ギュッと締め付けられる感じだっ」
「んっ、ふふ、んふふふふー♪
シルフィーの中、どーですかー？」
「ふわふわとろとろで最高だよ・・・」

「それじゃまずはシルフィーちゃんに・・・
くっ、おおっ、これはっ、ふわふわでありながらもっ、
ギュッと締め付けられる感じだっ」
「んっ、ふふ、んふふふふー♪
シルフィーの中、どーですかー？」
「ふわふわとろとろで最高だよ・・・」

「じゃあ次は、この！
可愛いコボリーちゃんのお尻に入れちゃうね」
「んんっ！お、おきゃくさま、そんなしっかりおしり掴んで、
や、優しく、お願いします・・・優しく、ですよ」
「はいはい、うわ・・・こっちは小さくて
ぎゅんぎゅんキツイくらいに締め付けてくる・・・
あー、先に謝っとくねコボリーちゃん、
これ我慢できそうにないわ、おじさん限界」
「ん、んうっ、んんっ、げ、限界？限界、って・・・
ひうっ！おっ、おきゃく、おきゃくさまっ！
はっ、はやっ、はやすぎっ、優しく、やさしくっ、てっ！
んう、わらしっ、お、お尻、壊れちゃうっ！」

「じゃあ次は、この！
可愛いコボリーちゃんのお尻に入れちゃうね」
「んんっ！お、おきゃくさま、そんなしっかりおしり掴んで、
や、優しく、お願いします・・・優しく、ですよ」
「はいはい、うわ・・・こっちは小さくて
ぎゅんぎゅんキツイくらいに締め付けてくる・・・
あー、先に謝っとくねコボリーちゃん、
これ我慢できそうにないわ、おじさん限界」
「ん、んうっ、んんっ、げ、限界？限界、って・・・
ひうっ！おっ、おきゃく、おきゃくさまっ！
はっ、はやっ、はやすぎっ、優しく、やさしくっ、てっ！
んう、わらしっ、お、お尻、壊れちゃうっ！」

ークラスメイトの中城さんがバイトしてるって聞いたから、
地元にある気まぐれに古くてボロイ遊園地に来てみたら
こんなことになるなんて・・・
「へへ、な、なんか照れちゃう、ね。XXくん、わたしも脱いじゃうね」
ーう、うぉお！？俺がテンパってる間に、
中城さんの乳首が！
いつも妄想してオナニーしてた中城さんの乳首が目の前に！！！

「XXくん？ちょっ、ちょっと、XXくん？うわっ！」
中城さんの胸を見ただけで、ぼ、暴発してしまった・・・これは男として最低だ・・・
「ッ」
「くすっ、XXくんって面白いね」
（中城さん、可愛い～！これはすぐ復活しそうだ！）

「こういうのって初めてで、照れちゃいますね」

美衣乃ちゃんはこういう仕事は初めてらしく、
少し照れながら俺を、古びた遊園地の管理棟の一室へと案内してくれた。

美衣乃ちゃんに会ってからというもの、俺はとてつもなく、過去最大級に、
全身に血が沸騰しているのを感じていた。

「こんなポーズって、アイドルさんみたいですね」
「慣れてなくてすいません。今日も「うぞー！」って、お兄ちゃんに心配されちゃって」
「ぜ、ぜんぜん、大丈夫、だよ」
こんなソフトなポーズなのに、いつもよりめちゃくちゃ興奮してしまう。
昔から俺も結構、こういう遊びはしてきた方だけど、
こんなに心臓の鼓動を一拍一拍感じた事なんて・・・
そういえば俺、さっきから胸が痛いな・・・

「私をご指名いただきまして、ありがとうございます～♪」
「昔から、ファンだったんですっ！
AV、アニマルビデオの時からっ！
すごくエロい声で動物の交尾を
実況なんてしちゃうからっ！
ずっとそれ聞きながら1人でしてましたっ！」
「あらあら～、
それでは今日は私とい～っぱい、
どうぶつさんの交尾を♪
しなければいけませんね～♪」

「私のなかでっ♪どんどん生殖器が♪
大きくなって行きますね♪」
「人間の生殖器は興奮すると亀頭が大きくなって、
射精するとメスの子宮にどばどば♪って
精子を撒き散らしちゃうんですよ♪」
「映子さん、そんなエロいことを
そんな良い声で言われたら
もう出ちゃいますっ！
ううううぅぅぅぅぅ！！！」

「お客様は、本当にこのようなもので興奮なさるのでしょうか」
「ええ！アーシェさん、本当にすばらしい身体です！
このトリケン、思わず前屈みです」
「もう少し腰を下げて」
「こうでしょうか」
「こちらを蠱惑的な瞳で見つめて！」
「こうでしょうか」
「そこでくぱぁ！です！」
「く・・・くぱぁ？とは・・・」

「神が作られた実に美しい女性の生殖器をあるがままの形で
お客様に見て頂くことでこのパークの美しさを婉曲的に！
表現するのです！」
「は、はぁ・・・・」
「さぁ！このように股の間から逆ピースで！さぁ！」
「おおおおおおおおおお！こ、このトリケン！
アーシェさんの美しさに思わず！
我が一族に伝わる聖なる液体を発射してしまいそうです！」

「いやぁ、まさかパークの様子を見に来てみたら、
オヒメサマの身体を頂けるなんて思いませんでしたよ」
「わ、私は、このパークと可児江さまのためにならと・・・きゃっ！」
可児江さまが突然私の元にいらっしゃったのはついさっきのことで、
可児江さまは
「ラティファ様、パークのことを本当に想っているなら、
なんにも言わずに、今から来る人に全部、
ぜぇーんぶ、任せるミー！」とだけ仰ったのですが・・・

わたくしの身体が、見えないゲスト様によって、
もうわたくしの身体ではないことが分からされるまでには、
20分もかかりませんでした。
「やっ、あっ、このままではっ、わたくし変にっ！
変になってしまいますっ！可児江さまっ！可児江さまっ！」
「うわー、もうぐっちゃぐちゃ、お腹の方もだらしなく下がって
きてるじゃないですかオヒメサマ、
そういう時は『イク』って言うんですよ。
それが上流階級の嗜みってもんです」
「イクっ、イクうっ！イクの、したいですうっ！」

「本当に世間知らずでバカなオヒメサマだ。
『ラティファ、イカせていただきます、ごめんなさい』でしょ？
ほら、さっきからずーっと一番好きな、ここの裏つかわの所、
ぐちゃぐちゃに弄ってあげますからね、
教えてあげたように大声で言うんですよ」
「やっ、やぁぁっ！そこっ、そこはダメなのですっ！
いけませんっ！そこをズリズリされてはっ！
ラティファ、イク、イってしまいますっ！イカせていただきますっ！
可児江さまっ、いずさんっ、おじさまっ！ごめんなざいっ！
ごめんなざいいいいいっっっっっ！！！」